

日本における中国キリスト教史研究について

—— 日中戦争期を中心に⁽¹⁾ ——

渡 辺 祐 子

はじめに

日本の中国史研究においては、中国でのキリスト教の展開について、「中国文明」を「キリスト教文明」によって相対化させたカトリック布教の重要性や、キリスト教が清末中国社会の変動に与えたインパクトという観点から関心が持たれてきた。しかしその際キリスト教は、キリスト教的博愛の精神が中国の教育や福祉にどれだけ貢献したのか、宣教師がもたらした西洋文明の「知の体系」が中国の知識人をどれだけ刺激したのか、宣教師が清朝の対外外交にいかに関わったのか等々、その社会的、政治的意味について論じられることがほとんどで、キリスト教そのものが主役として扱われるわけではない。たとえば、中国における教会形成の歴史や、中国の文脈でキリスト教神学がどのように発展してきたのかという問題への関心は極めて希薄である。

いっぽう日本における歴史神学の領域で、中国キリスト教史がどの程度関心を持たれているかといえは、これもまた「端役」の扱いでしかない。隣国であり、自国のキリスト教史と密接な関連があり、何よりも伝道地として世界最大の中国で、キリスト教がどのように受容され広まったのか、その歴史に対する日本の神学者の視線は不思議なほど微温的で

ある。しかしながら日本人神学者、あるいは宗教学者による中国キリスト教史自体の研究が皆無というわけではない。

本稿の目的は、こうした問題関心を出発点として、戦前の日本における中国キリスト教史研究のうちいくつかの代表的な著作を取りあげ、その内容を概観することである。

その多くは、唐代のネストリア派キリスト教（景教）布教、元代のカトリック布教、明末以降のイエズス会宣教師による布教活動など、一般的な中国キリスト教史の概要をカバーしているが、中でも集中的に扱われているのは、19世紀後半から彼らの同時代に至るプロテスタント伝道の歴史である。各々の著者は、19世紀後半に結ばれた日本と中国の近代的外交関係がついに破綻し、日中全面戦争が勃発したその前後に執筆に取り組んでいたのだった。したがって本稿の関心は特に、かれらの中国キリスト教史を見るまなざしが、現実の対中国外交からいかなる影響を受けていたのかという点に置かれることになる。

1930年代以前

日本語で書かれた最初期の中国キリスト教史に関する著作に、1926年に出版された翻訳本がある。鈴木哲が訳したグスタフ・コル著『支那西教史考』である⁽²⁾。現在これらの著者と訳者について多くの情報は残っていないが、原著者のコルは、中国江蘇省の興華で伝道していた宣教師で、本書の内容からおそらく中国内地会とのつながりがあったと思われる。訳者の鈴木は無教会派のキリスト者だった。

コルが本書を執筆した目的は、母国の教会人たちに宣教師の偉大な働きと中国人キリスト者の状況をよりよく理解してもらうことだった。原著を読んで彼の意図に共鳴した鈴木は、中国に関心を持つ日本人キリスト者に神の福音の拡大を紹介しようと決意する。本書は学術書ではなく

むしろ信仰書の類だが、中国におけるキリスト教布教を大雑把であつてもともかく日本語で記した最初期の書物である。

宣教師たちの霊的影響の大きさを強調する傍ら、コルはなぜ多くの中国人がキリスト教に対し敵対的な感情を持っているのかを考察する。その原因は、西欧諸国が中国に暴力で押し付けた不平等条約によって宣教師の活動が特権的に守られていることだとコルは明確に述べる。中国の人々は、新約時代の使徒たちの無私の奉仕と今の宣教師たちの違いを見抜いているともいう。さらに彼はつづけて、この反キリスト教感情があるからこそ、中国は今後西洋諸国よりも日本と手を結ぶ可能性はより高いだろうと予測している。執筆していた時期は日本軍の山東半島領有による反日感情がいまだくすぶり続けていたにもかかわらず、コルは中国とキリスト教国との関係をこのように見ていた。

彼が原著を出版した1922年は、五四運動で一気に高まった反帝国主義運動が、再度高揚期を迎える直前であつた。もちろん彼の予測は大きく外れるわけだが、この時の状況判断は、彼自身がこの運動を帝国主義とキリスト教伝道の関わりを問うものとして真摯にとらえていたことを示している。当時の宣教師が不平等条約の問題を宣教の問題として深刻にとらえ始めるのは、1925年の5・30事件を契機としているので⁽³⁾、コルの意識は一般の在華宣教師の中ではかなり高かつたのではないかとも思える。一方で、本書の日本語翻訳版がどれほど出版され読まれたのかは知る由もないが、こうしたコルの予測は、日本人キリスト者の読者には好意的に受けとめられたであろう。

コルの著作が日本語に訳される15年前の1911年には、もともと言語学者でありその後ネストリウス派キリスト教研究に打ち込む佐伯好郎が、ネストリウス碑文研究を出版している。本書は日本国内よりも世界で非常に高く評価され、彼は一躍ネストリウス博士として世界にその名が知られるようになった。しかしこの当時の彼の学問的関心は、あくま

でも言語学的分析に限られており、未だキリスト教の歴史的研究には手を付けていなかった。彼がシリーズものの中国キリスト教史を世に問いだすのは、それから30年後のことである。したがって1930年代以前には、日本人自身の手による中国キリスト教史の学術研究は生まれていなかったといえるだろう。

1930年代から1940年代まで

中国キリスト教史に関する最初の翻訳書が出版されてから今日に至るまで、このテーマを扱った書物が最も積極的に出版されたのは、日中戦争期に完全に重なる1938年から1944年までの時期である。それらの書物を以下に列挙してみよう。

- ① 衛藤利夫『満州生活三十年 奉天の聖者“クリスティ”の思出』大亜細亜建設社、1935年
- ② 矢内原忠雄『奉天三十年』岩波書店、1938年
- ③ 比屋根安定『支那基督教史』生活社、1940年
- ④ 竹森満佐一『満州基督教史話』生活社、1940年
- ⑤ 溝口靖夫『東方文化史上の基督教』理想社、1941年
- ⑥ 沢崎堅造『東亜政策と支那宗教問題』長崎書店、1942年
- ⑦ 佐伯好郎『支那基督教の研究』第一巻－第三巻、春秋社、1943年－1944年

ここでは筆者がこの中でも特に重要と思われる②③⑤⑦の書物について論じていくが、その前にこれらの著作の背景となった政治的、社会的状況を確認しておきたい。

1) 歴史的背景

日中戦争開始から敗戦に至る時期に書かれた中国キリスト教史の大きな特徴は、東亜秩序建設の国策への奉仕という目的を濃厚に反映させていることである。

開戦前からすでにキリスト教に対する締め付けは厳しさを増していたが、日本のキリスト教界は、政府の要請に答えて戦争協力の意思を表明した。当時の超教派組織日本基督教連盟が、1937年9月に発表した「支那事変ニ関スル声明」はその典型的な例である⁽⁴⁾。また同年12月には、当時の代表的なキリスト教指導者45名が連名で「世界各国にあるキリスト教指導者への開書」を発表した。それは、「中国政府の抗日政策、容共政策が日本の東アジアにおける既得権益を著しく脅かしたので、防衛せざるを得なくなった。しかしこの戦争は一時的なものであるから、各国のキリスト者は、事態を感情的に判断することなく、冷静に見守ってほしい」という、海外の厳しい見方をかわそうとする自己弁明的な内容に終始している⁽⁵⁾。

さらに1939年になると、同連盟は「国民精神総動員新展開ノ基本方針ニ対スル基督教ノ実施強化案」を発表した。ここで掲げられている提案の中には「国際世論ノ是正ニ関シテハ事変勃発以来取り来タリシ方針ニ基ツキ今後モ尚在留宣教師ノ協力ニ俟ツテ、各国基督教諸機関ヲ通ジテ我邦ノ根本目的ニ対シ正当ナル理解ヲ遂ゲシムルニ必要ナル方法ヲ講ジ、殊ニ在支宣教師ノ事態認識ヲ深メシムル方策ヲ取ルコト」「『東亜伝道会』ヲ機関トシテノ支那人伝道ノタメ教師ヲ派遣」すること、「中華基督教ノ指導者並ニ在支宣教師ノ来朝ニ際シ、適正ナル接触指導」を行うことが含まれている⁽⁶⁾。

この中で言及されている東亜伝道会とは、日本初のプロテスタント超教派による海外布教組織である。当初は「満州伝道会」として日本基督教会（当時）富士見町教会を本部に設立され、日中戦争開始に伴い「東

亜伝道会」に改称した。つまりこの「強化案」では、中国在住の欧米宣教師に働きかけて日本に対する誤解に満ちた国際世論をただしてゆくこと、日本人宣教師による中国人伝道を積極的に推進すること、そして中国人キリスト教指導者、欧米宣教師と接触し、彼らを「適正指導」し、国際世論の是正を行っていくことが提案されているのである。

中国キリスト教史関連書物の出版は、こうした政治状況を背景に、日中戦争勃発後から敗戦までの時期に集中した。事実いくつかの著作には、「東亜新秩序」の建設を執筆動機に挙げているものが少なくない。新しい東亜の秩序を日本が作り上げるためには、日中戦争当時の中国における欧米の政治的プレゼンスをいかに克服するかがカギとなるが、そのためにはまずそれが歴史的にどのように形成されてきたのかを検証する必要がある。欧米の政治的プレゼンスは数々の対支文化事業を通して作り出されたもので、その一翼を担っているのが欧米宣教師によるキリスト教布教活動に他ならない。したがって彼らの伝道の歴史を考察することが、東亜新秩序の建設に至る貴重なステップとみなされるわけである。

それでは、各々の著作にはどのような特徴がみられるだろうか。以下上に挙げた4つの書物をみてゆこう。

2) 矢内原忠雄『奉天三十年』

矢内原が翻訳し、岩波新書第一号として出版された『奉天三十年』は、①の衛藤利夫の著作と同一の底本を用いている。スコットランド人宣教師クリスティの妻が編集した *Thirty Years in Moukden, 1883-1913, being the experiences and recollections of Dugald Christie* である。医師であったクリスティは、1883年にスコットランド一致長老教会宣教医として奉天（Moukden, 現瀋陽）に派遣され、1922年に帰国するまで一貫してこの地で医療宣教の業に仕えた。当然彼はこの間、日

清戦争、義和団戦争、日露戦争というこの地域を激震させた大きなでき事を目撃し、その時の状況を手記にしたためた。彼の奉天在住30年の節目に、彼の妻がこれらの手記や夫の回想を編集してこの本が生まれたのだった。

①の著者である衛藤利夫は、南満州鉄道株式会社によって瀋陽に設立された満鉄図書館の図書館長を長く務めた人物である。衛藤がこの書物を手にしたのは、ちょうど瀋陽の歴史に関する資料を収集していた時であった。衛藤はクリスティの回想記が、一宣教医の献身の記録であるだけでなく、この都市の生きた歴史を語る証言となっていることに着目し、日本の読者に紹介しようと決意、厳密な翻訳というよりも、著作の原意を損なわない程度に自由に執筆するという形式をとって本書を出版した。

この原書を完全な形で翻訳したのが矢内原である。ここで矢内原の経歴を振り返ることはしないが、この翻訳書『奉天三十年』が、彼がいわゆる矢内原事件で東京帝国大学を追われた直後に出版されたことは留意しておくべきだろう。本書は、辞職後の彼の生活を案じた岩波茂雄が翻訳を持ちかけ、矢内原が応じて刊行されたのだった。

矢内原の翻訳の意図は、衛藤よりもさらに明確である。満州問題、中国問題を解決し東洋に平和をもたらすためには、何よりも満州人、中国人の「人心を得」なくてはならないが、それは「国家の愛撫政策」や「国家を背景とした公私の利得的行動」によっては実現不可能である。彼らのために無私の奉仕を息長く続けることができる個人をかの地に送り出さなくてはならない⁽⁷⁾。そう考える矢内原は、クリスティの生き方がそのお手本であると考えた。

本書が今なお読者の感動を誘うのは、宣教医クリスティが、戦乱、政治的混乱、伝染病（肺ペスト）の流行と、打ち続く困難に呻吟する弱く貧しい人々に一貫して徹底的に寄り添い仕えているからである。日清戦

争のときも義和団のときも、そして日露戦争でも、彼は常に戦争の被害者を案じ、彼らのために奔走した。加えて彼は、19世紀的宣教師にしばしば見られる救済者然とした見方をとらず、中国の歴史や文化に敬意をもって接している。さらに単に博愛精神に満ちているというだけではなく、地方官とも積極的に友好関係を築き、優れた官僚を公平に評価し、必要に応じて協力するという冷静さ、柔軟さを兼ね備えてもいる。彼が綴る民衆から官僚に至るまでの幅広い人々との交流の記録は、衛藤利夫の言う通り、すぐれた歴史資料となっている。

クリスティの冷静な観察眼は、日露戦争時に奉天を占領し戦後もなかなか完全撤退しなかった日本軍兵士についての短い言及にも示されている。彼は総司令官大山巖ら複数の軍人との親しい交流を喜ぶ一方で、次のような指摘も忘れない。「日本兵士並びに満州に来た一般人民は」「日本は優秀最高だ、支那は無視すべし、かういふ頭で、彼等は救ひ主としてではなく勝利者として来り、支那人をば被征服民として軽侮の念を以て取り扱った」。それによって一般民衆の間に反日感情が醸成され、「これらの感情は、これを根絶することが困難である」⁽⁸⁾。

日本に不都合な叙述もあえて訳出する矢内原が、平和の使徒である宣教医クリスティの思想に自らを重ねていたと考えることは、的外れではないだろう。

3) 比屋根安定『支那基督教史』

③から⑦までのうち中国キリスト教史を概観した著作は、③、⑤、⑦である。そのうち最も早い1940年に書かれた③の著者青山学院神学部教授の比屋根安定は、宗教史、中でも日本キリスト教史の専門家で、中国史や中国キリスト教史については全くの素人だった。その彼を本書の執筆に踏み切らせたのは、「対支文化事業の調査」のためには中国キリスト教史の研究が必須であるにもかかわらず、正面から「キリスト教

史」に取り組んだ書物がないこと、日本が中国で文化工作を行う際に、欧米宣教師のそれを参照すべきであること、比屋根がそれまで手掛けた日本キリスト教史が中国キリスト教史と密接にかかわっていることであった⁽⁹⁾。

本書は、景教伝来から清末プロテスタント伝道、1933年に結成された日本人による伝道団体、東亜伝道会までの歴史を追っている。しかし一次資料はほとんど用いておらず、わずかな参考資料を右から左に写したと思われるような、事実を羅列した教科書的概説にとどまり、後述する佐伯や溝口の研究と比較するとかなり遜色があるといわなくてはならない⁽¹⁰⁾。ただし概説書としての利便性は高い。

本書における清末以降のプロテスタント史の叙述は、それ以前の時代の叙述と同様歴史概説と言えるが、それに加えて、欧米宣教団体による多方面にわたる宣教事業のデータに大きな関心が寄せられている。ただしそれもデータ紹介の域を出ておらず、しかもデータの出所が一切示されていない。

さらに執筆対象時期が同時代に近づくにつれて、民国期のキリスト教に国家主義が大きく影響していることを過度に強調するなど、予断に満ちた政治的発言も散見されるようになる。蒋介石、宋美齡の抗日意識は哀れむべきだが、それは彼らのキリスト教信仰にも基づいている、という明らかな偏見や⁽¹¹⁾、「(1920年代の) 基督教反対論者の間に、左翼イデオロギイに基づいたものがゐた事は、従来の支那のキリスト教反対論と異なるものである (カッコ内筆者)」という皮相的な総括は⁽¹²⁾、時代意識を色濃く反映させたものであろう。

比屋根の著作の、良くも悪くも最大の特徴は、東亜伝道会に関する叙述に最後の一章を割いていることである。それ以前の章と異なり、最終章だけが彼のオリジナルと言ってもいいだろう。上述したように、東亜伝道会による日本人宣教師の中国派遣は、日本基督教連盟が「国際世論

の是正」のために掲げた方法のひとつだった。その意向に沿うかのように、比屋根は連盟が「日支親善」のためにいかに心を砕いてきたかをいくつかの事例を挙げて述べる。いわく、盧溝橋事件勃発直前の5月に連盟が日支修好のために代表団を派遣したこと、日中戦争開始直後に連盟が時局奉仕委員会を組織し、国際世論の是正に努め、現地宗教工作を行って日本人キリスト者の奉仕を促したことなどである⁽¹³⁾。

比屋根は、この奉仕の業に携わる多くの宣教師が、東亜伝道会によって派遣された人々であったとし、満州と中華民国の各地に合わせて77か所の伝道地があり、受洗者1800名、教会員総数2200名が与えられており、「その成績は予期以上にして、日進月歩の状態にある」と述べている⁽¹⁴⁾。当然のことながら比屋根は、東亜伝道会の活動地が日本軍による爆撃と殺戮が行われた末の占領地であったことには全く触れていない。そこでどのような「奉仕」が行われたのか、現地の中国人がそれらをどのようにとらえていたのかについての言及ももちろんない。比屋根の関心は、隣国への興味や、隣国で生きる中国人キリスト者に対してではなく、日本のキリスト教界の東亜新秩序形成への参与にもっぱら向けられているようである。

東亜伝道会に所属していた宣教師たちは、自らが中国人伝道に尽くすことによって国際世論の是正に努めたいという純粋な思いを抱いていた。しかし彼らの個々の思いがどんなに麗しいものであっても、彼らが赴いた伝道地は、日本軍の武力侵攻によって得られたものであり、現地では軍人ではない宣教師も、軍の圧倒的な力を後ろ盾とした絶対的な支配者と見られていたことは否定できない⁽¹⁵⁾。

比屋根は戦後も精力的に宗教史研究にいそしむほか、宗教学関連の執筆も行っているが、戦前の中国キリスト教研究をさらに発展させようとした形跡はない。東亜伝道会の実像がある程度批判的に検証されるようになって、比屋根自身は戦前の自身の発言を顧みることはなかったよ

うである。比屋根のこうした戦後の姿勢は、東亜新秩序形成への寄与という本書の目的を一層際立たせているように見える。

4) 溝口靖夫

③⑤⑦のうち検証可能性という点で最も優れているのは、依拠した資料が丁寧に明示されている溝口の著作である。同志社大学神学部出身の溝口は歴史神学の学者であり、前述の比屋根同様、東洋史の専門家ではなかったが、1930年ごろ留学先のシカゴ大学で「東洋におけるキリスト教と政治運動」「キリスト教の伝播と文化の交渉」という授業を聴講した経験が土台にあり、その後の東アジア情勢の激変が執筆を促したと述べている⁽¹⁶⁾。

本のタイトルにある「東洋」とは、ペルシア、インド、中国の三つの地域を指し、「文化史」とはキリスト教と異文化との接触の歴史を意味している。タイトルからは、キリスト教が「東洋」の文化に及ぼす影響を与えたのかという内容が想像されるが、実際溝口がもくろんだのは、「東洋」におけるキリスト教伝道＝異文化接触の過程に、政治外交が及ぼしたのかを歴史的に考察することである。極論すれば、彼の言う「文化」は政治外交の手段であり、「東亜の新秩序を樹立し」「被侵略地の民心を収攬する」⁽¹⁷⁾ためのツールなのである。それゆえ、宣教師からのキリスト教諸事業の主導権奪還と「基督教の正しき東洋的展開」のために、中国民心の収攬に成功した欧米宣教師の伝道活動＝文化事業を振り返ることが執筆の目的とされたのだ⁽¹⁸⁾。

しかし実際の内容は、こうした勇ましい目的を達成するものとは必ずしもなっていない。中身を子細に読むと、掲げられた目的から生み出される読者の期待に必ずしも沿わない内容となっている。

溝口が、当時入手可能なすべての欧文文献を網羅したといってもよいほど数多くの資料を参照、引用していることは注目に値する。これ

らの資料の中にラトゥーレットの大著が含まれているのは言うまでもない⁽¹⁹⁾。それだけでなく、Medhurst, Gutzlaff, Alexander Wylie, W. A. P. Martin, John Nevius など初期の宣教師の著作、各伝道会の記録、エディンバラ会議（1910）はじめ国際宣教会議の記録、*Chinese Repository*, *Chinese Recorder* 等の一次資料など、今日の中国キリスト教史研究でも必須の基本文献として使われている資料が縦横に引用されている。漢文資料やカトリックに関する資料は用いられていないものの、当時の日本のプロテスタント神学者の研究としては、最も高い水準に達していると考えるのが妥当であろう。

こうして溝口は多くの資料に依拠しつつ務めて客観的考察を行っているが、しかし無理な解釈や牽強附会も見受けられる。たとえば、パリ大学神学部がイエズス会の孔子崇拝に対する妥協を批判し、1700年に同会を完全否認したことを非難し、「同じようなことが今日欧米の基督教の学者によって、我が国の基督教者に向かってなされている」という⁽²⁰⁾。当時の日本のキリスト教会やキリスト教学校が神社参拝に抵抗しないことに対し、欧米キリスト教会が批判の目を向けていることを念頭に置いている指摘である。

そのほか、島原の乱と太平天国を安易に比較するなど、非専門家の勇み足も見受けられるが⁽²¹⁾、全体の内容は序文で述べている執筆目的とは裏腹に、天皇制国家主義が前面に押し出されているというほどではない。プロテスタント宣教師の伝道活動に関する叙述からは、むしろ溝口の彼らに対する心からの敬意が感じられるほどで、冒頭で溝口が述べた「宣教師が中国民心を収攬した」として本文中で批判的に挙げられている具体的な事例も決して多くない。

最終ページでようやく、蒋介石の排日政策を、神と隣人を愛する精神を忘れた不当な姿勢だと批判し、むしろ日支両国のキリスト者がキリスト教の東亜的展開に貢献し、東亜新秩序を目指すべきであるという時局

向けの主張が現れる⁽²²⁾。勇ましい目的を掲げた序文との整合性がこうして計られているようにも思える。このように見てくると、与えられた厳しい制限つきの条件のもと、溝口は最初と最後に時局に協力するための方法を語りながら、しかし彼の本来の執筆の意図は別なところにあったのではないかと推測できる。比屋根の著作の翌年、すなわち日米開戦のきな臭さがさらに濃くなりつつある時期に書かれた溝口の著作だが、時局迎合の度合いは比屋根のそれよりもまだ抑制的であるということが出来るだろう。

5) 佐伯好郎『支那基督教の研究』

ネストリウス博士と呼ばれた佐伯の著作⑦は、文中に多くの碑文、原資料を引用し、きわめて詳細かつ専門的なカトリック史となっている。ただし扱われている時代は元代から清初で、またその筆はプロテスタント史までは及んでいない。当初は清代のキリスト教史までを網羅した五巻本を出版する予定だったのだが、景教から典礼問題までの三巻が出版された時点で敗戦を迎え、戦後1948年になって四巻目にあたる『清朝基督教の研究』が出版され、このシリーズには終止符が打たれた。

佐伯の大著を詳細に論じることは筆者の手に余るが、小論のテーマに即して2点指摘しておきたい。一つは彼がこの大著の執筆目的を、「思想謀略の見地より支那の基督教事業を観察」することと明確に述べており、事実溝口と異なりその目的に沿った叙述がなされている点である。佐伯は随所で、キリスト教会が「Imperium in Imperio（帝国内帝国）」の樹立を目指していることに警鐘を鳴らし、こうした意図に基づく布教活動によって多くの中国人キリスト者が誕生したと述べ、「蓋し支那基督教徒の数こそは実に欧米列強の対支宗教政策研究の絶対条件（Sine qua non）になる」⁽²³⁾と断言している。佐伯によれば、教会ないし宗教はあくまでの国家の認定があって初めて存在を許されるものである。

ローマにおいてキリスト教が繁栄したのも、国家が熱心に迷信を撲滅しキリスト教を保護したからであるし、中国でカトリック布教が一時的にであれ成功したのも、康熙帝の全面的な支持が得られたからに他ならない。したがって、国家主義に対抗した教会至上主義を唱えることはあつてはならないというのが佐伯の主張である。

佐伯のこうした視点は、18世紀初頭に起きた典礼問題の理解にもそのまま生かされている。典礼問題とは、孔子崇拜、祖先祭祀といった中国の伝統儀礼＝典礼をめぐる論争を指す。まずカトリック教会内で適応主義をとるイエズス会とこれに反対するドミニコ会、フランシスコ会とが対立し、最終的には教皇が典礼を偶像崇拜とする禁令を発布（1715年）、この漢文訳に激怒した康熙帝がそれまで容認していたキリスト教の厳禁を宣言した。国家主義者である佐伯は当然のことながら中国の「国家儀礼」を重んじるイエズス会を支持し、ローマ教会の判断は、彼らの努力を踏みにじり多くのカトリック教会と信徒が失われることになったと結論づける⁽²⁴⁾。さらにこの問題を現代日本に置き換えて「大日本帝国の臣民でありながら羅馬法王の「教民」たることを名誉と誤解する不心得者が無いとも限らない」とし、康熙帝による勅令原文を付しているのである⁽²⁵⁾。佐伯のこうした宗教観は、日本において国家神道が教派神道、仏教、キリスト教の上位にあった時代の宗教理解を濃厚に反映させているといえよう。

おわりに 戦後から現在まで

戦前からすでに中国キリスト教史研究を手掛けていた研究者が戦後も継続して更なる研究に取り組んだ例は、佐伯を除いて皆無である。佐伯の場合も戦中に出版する予定だったシリーズ最後の巻を戦後直後に出版したのが最後となった。以後、日本人研究者の手による中国キリスト教

史研究は、1958年に中国カトリック史研究で知られる矢沢利彦が長江流域教案に関する論文を発表した以外は、山本澄子、吉田寅を中心とする研究者が登場する1970年代まで待たなくてはならなかった。

中国キリスト教史研究の確立に最も大きく貢献したのは、ラトゥーレットによる中国伝道史研究である。戦後は、こうした実践神学の一分野としての伝道史研究と並行して、あるいはそれと交差する形で、J. K. フェアバンクや彼の門下の中国近代史研究者たちを中心に、中国社会に対するキリスト教の影響が考察され始めた。戦後の中国キリスト教史研究は、西欧が中国にいかなる影響を与えたのかという、いわゆる「西欧の衝撃」論を背景としながら、歴史神学においても中国史研究においても、アメリカ中心に進められることになった。

当然のことながら、日本人による研究もアメリカの影響を強く受けることになる。その代表的な研究者が山本澄子である。山本はアメリカ留学中に収集した宣教師文書をもちいながら、1920年代の中国人神学者の思想を通してキリスト教の中国における土着化の問題を考察し、1972年、『中国キリスト教史研究』を世に問うた⁽²⁶⁾。

山本の研究に対し、キリスト教が中国の半植民地化に手を貸したとする立場からは、キリスト教史に特化した研究はなされていない。後者の研究においてキリスト教への言及は、仇教運動や義和団などにみられるごとく、中国民衆にとって西欧の帝国主義支配を象徴するものと位置づけられ論じられる場合に限定されている。

1970年代以降の研究者としては、さらに矢沢利彦と吉田寅を挙げなくてはならない。矢沢は1972年にカトリック史を中心とする『中国とキリスト教』を出版、さらにイエズス会書簡集や岩波書店の大航海叢書の一部など、カトリック史研究の基本文献となる多くの資料の翻訳に携わった⁽²⁷⁾。

もともと宋代研究が専門であった吉田は、在華宣教師が著した漢文資

料に着目し、日本全国の図書館、資料館を訪ねて膨大な漢文著作を収集、それらをもとに書誌学的研究をものした。吉田の研究の重要性は何よりもそのち密な分析や考察にあるが、キリスト教漢籍本を仲介者とする日中の宗教的、文化的交流を明らかにしている点にも目を留めるべきであろう⁽²⁸⁾。

中国キリスト教史を研究する環境は、中国自身の改革開放路線を背景に飛躍的に好転した。多くの外国人研究者が直接中国に足を運び、現地調査と資料収集が行えるようになった。それに加えて宣教師文書等、研究に不可欠の資料がマイクロフィルム化され、各地の資料館に直接赴かなくては手も足も出なかった状況に大きな変化が訪れた。現在ではマイクロフィルム化からデジタル化が少しずつ進み、研究環境はさらに劇的に発展しつつある。

こうした資料の利便性の高まりとともに、最近では中国史研究の中でも地域史研究を手掛ける研究者たちが、各地域に派遣された宣教師たちの本国伝道局への報告等、いわゆる宣教師文書に着目している⁽²⁹⁾。彼らの関心は、当該地域におけるキリスト教伝道史そのものにはないが、現地調査を踏まえつつ、中国側の資料が語らない情報を雄弁に語る宣教師文書を駆使しながら、すぐれた研究を発表している⁽³⁰⁾。

一方中国キリスト教史研究の領域では、日中関係をキリスト教史からとらえようとする関心が高まっている。漢籍の流入を通じて日本の知識人がキリスト教の情報を得ていた19世紀、本稿ですでに述べた日中戦争期、さらには人民共和国成立後までの過程において、日中のキリスト教（キリスト者、キリスト教会）がどのような関係を相互に結び、そこにはどのような問題が見出されるのかを考察することは、中国キリスト教史研究全体の歴史像をより豊かにするために日本の研究者がなすうる貴重な仕事ではないかとも思われる。

もとより、日本において中国キリスト教史研究に携わる研究者の絶対

数はまだまだ非常に少ない。台湾、香港、そして大陸で次々に発表、出版される膨大な量の中国キリスト教史関連の論文、著作を消化するのも容易ではない状況があり、これまでもすでに影が薄かった日本の研究の存在が、ますます後方に退いてしまうことが懸念される。しかし2年前、若手研究者有志による研究会「中華圏プロテスタント研究会」が設立され、年3回の定例会が開かれるなど、規模は小さくとも地道な研鑽が積み重ねられつつある。山本澄子、吉田寅らが開拓し道筋をつけた中国キリスト教史研究が引き継がれ、より新しい視点と角度から豊かな実が結ばれることを期待すると同時に、筆者もまたそのために微力を尽くしたいと思う。

注

- (1) 本稿は英文雑誌 *Christian Review in Asia* (Vol.7, 2014) に掲載された論文 *Japanese Studies on Christian History in China, with a focus on the period from 1937 to 1945* を一部改変し日本語にしたものである。
- (2) グスターフ・コル著、鈴木哲訳『支那西教史考』向山堂書房 大正15年(1926年)。Gustav Koll, *The Christian Church in China*, Loizeaux Brothers, 1922.
- (3) 拙稿「キリスト教伝道と国家」『国境を超えるキリスト教』(教文館, 2013年所収)を参照。
- (4) 『聯盟時報』第162号, 1937年9月。
- (5) 中濃教篤『天皇制国家と植民地伝道』国書刊行会, 昭和51年, 46-47頁。
- (6) 『聯盟時報』第186号, 1939年9月。中濃, 48頁。
- (7) クリスティ『奉天三十年』上巻, 岩波書店, 1938年, 4頁。矢内原は、東大辞職後自ら創刊した雑誌『嘉信』でも本書に触れて次のように述べている。「之は読物として興味あるのみでなく、満州人及び支那人との和平協同について関心ある日本国民は、之を読んで熟慮反省を促さる節が少くない。」「嘉信」第一巻十二号, 1938年, 41頁。

- (8) クリスティ, 下巻, 263-264頁。
- (9) 比屋根安定『支那基督教史』生活社, 昭和15年, 2-3頁。なお本稿が参照したのは, 本書の復刻版, 大空社刊 アジア学叢書245 (2011年) である。
- (10) 本書には注も参考文献一覧もない。唯一比屋根は, 自身が参照した書物として『燕京開教略』と『天教奉褒』の二冊の漢籍を挙げているのみである。
- (11) 比屋根, 296-297頁。
- (12) 同, 301頁。
- (13) 同, 316-318頁。
- (14) 同, 323-324頁。
- (15) 東亜伝道会については以下を参照。荒井英子, 張宏波, 渡辺祐子『日本の植民地支配と「熱河宣教」』いのちのことば社, 2011年。
- (16) 溝口靖夫『東洋文化史上の基督教』理想社出版部, 昭和16年, 1-2頁。
- (17) 同, 2頁。
- (18) 同, 2頁。
- (19) K. S. Latourette, *A History of Christian Missions in China*, Society for Promoting Christian Knowledge, 1929. 歴史神学者ラトゥーレット (1884-1968) は, キリスト教史, キリスト教伝道史に関する著作を80ほど著した。本書は2009年, 香港の複数の研究者によって中国語訳がようやく出版された。雷立柏他訳『基督教在華傳教史』漢学研究所, 2009年。
- (20) 同, 318頁。
- (21) 同, 294-295頁。
- (22) 同, 448頁。
- (23) 佐伯好郎『支那基督教の研究』第一巻, 春秋社, 1943年, 4頁。
- (24) 佐伯, 第三巻, 541頁。
- (25) 同, 545頁。
- (26) 山本澄子『中国キリスト教史研究』増補版, 山川出版社, 2006年。初版は1972年に東大出版会から出版された。
- (27) 矢沢利彦『中国とキリスト教』近藤出版社, 1972年。
同訳『イエズス会書簡集』平凡社 東洋文庫 全6巻, 1970-1974年。
同訳『中国キリスト教布教史』大航海時代叢書第Ⅱ期8, 9巻, 岩波書店,

1982-1983年。

- (28) 吉田寅『中国キリスト教伝道文書の研究—『天道溯源』の研究・附訳註』汲古書院, 1993年。

同『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院, 1997年。

- (29) 中国地域史研究とキリスト教の関連を理解するうえで『歴史評論 特集 キリスト教と近代中国地域社会史』(no.765, 2014年1月)が有益である。

- (30) 地域社会史研究というよりも, 地域社会というミクロの視点から清朝, そして清朝と国際社会との関係をダイナミックに論じた著作として『清末のキリスト教と国際関係』(佐藤公彦, 汲古書院, 2010年)が挙げられる。また『中国近代開港場とキリスト教 洪仁玕が見た洋社会』(倉田明子著, 東京大学出版会, 2014年)は, 膨大な資料を丹念に読み込み, 近代中国の開港場における知識人のキリスト教(=洋社会)受容の問題を実に緻密に論じた秀作である。